九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ナヌムの家訪問記

石川, 幸二
Kyushu Institute of Design

https://doi.org/10.15017/4061003

出版情報：芸術工学研究. 4, pp.59-67, 2001-08-10. 九州芸術工科大学
バージョン：
権利関係：

ナヌムの家訪問記

The Report for the House of Sharing

石川幸二
ISHIKAWA Koji

This report was written with the purpose of introducing to the public the paintings of Korean Women forced to work as sexual slaves for the Japanese Military at the time of the war. HARUMONI, recorded their feelings in the history and reported the fact that they were able to heal their traumas with art. These women came forward and confessed to the authority in Japan that were forced by the Japanese government to serve as Military Sexual Slaves during the war time. Reaching the age of 70's or 80's and seeking for an apology from the Japanese government, they are about to come to the end of their lives without achieving their goals. There were many persons who became mentally ill, killed themselves or died of illnesses at the slavery house. Those who still continue to ask for an apology from the Japanese Government may be considered as spiritual survivors of this atrocity. However, time is short for them due to their old age. From the paintings of these women I can strongly feel the anger and grief experienced by them, these paintings were done in order to regain their dignity which was affronted and discarded even by Korean society which over emphasizes private morality. In response to their urgent voices I hope that a conscientious apology from the Japanese Government will be delivered in the earliest opportunity to these women who were forced to work at the slavery house against their will in the context of history.

1 最初の訪問

地下鉄２号線江辺駅で降り Techno Mart 前のバス停から広州行きのバスに乗った。ナヌムの家を訪れるためだ。

元日本軍従軍慰安婦ハルモニ達の絵画を初めて目にしたのは５年前、月刊美術（中央日報社）８月号「解放５０年特別取材」の記事である。毎月送られてくる美術雑誌の何気ない写真の中に、何とも言えない感動を味わった。記事を読み直すと、そこには想像を絶する内容が書かれていた。「咲けなかった花、従軍慰安婦の恨」というタイトルでハルモニ達の絵画が紹介され、その絵に込められた思い、思い出すだに苦しい悔しさ、つらい思い、それでも描き続けるハルモニの思い、そしてハルモニ達に絵画を指導した先生の話などが記されていた。どうしても本物を見たいという衝動に駆られたものの、訪れる時間がとれず今日まで心の隅に置いておいた。今回私に物理的精神的余裕が生まれ、訪問が可能となったのだ。広州市内でバスを降りてタクシーに乗り「ナヌムエチブガジ　プータッカムニダ（ナヌムの家までお願いします）」と言った。ナヌムの家とは元従軍慰安婦ハルモニたちが共同生活をしている家で、ナヌムという語は「分け与える」、あるいは「分かち合う」という意味である。

ナヌムの家を訪れるにあたって、住所すら知らなかった私はまずソウルの月刊美術社に電話し、絵画を指導なさった李京信先生の電話番号を聞き出した。その後李先生と連絡が取れ、どのような動機で絵画を指導なさったのか、ハルモニ達はなぜ絵を描くのか等どうしても伺いたく、お会いできる機会を作っ

ていただいた。

スケジュールの関係で先にナヌムの家を訪れることにし、電話で伺ったとおり地下鉄、バス、タクシーを乗り継いでナヌムの家にたどり着いた。到着すると玄関に韓国女性が居られたので自分は日本から来てハルモニの絵画を見たいと告げると、「マユミー　イルボンサラミ　ワッタ」と後ろを向き大声で叫んだ。「万有美、日本人が来た」といったのだが、なぜそう叫んだのか理解できずとにかく門の中へはいると、若い女性が迎えてくれた。早速片言の韓国語で挨拶をし、訪問の理由を告げると、「おひとりですか？よくいらっしゃいました。私は日本人です」と流暢な日本語が返ってきた。こんな田舎の奥に、ましてやハルモニの家に日本人が居るなど想像もしなかった私は、「なぜ日本人がこんなところにいるの？」と韓国語で叫んでいた。

米倉万有美さんという若い女性で、大学３年の時ナヌムの家の院長である慧眞さんと出会い、その後ここでボランティアとしてハルモニたちの世話をするようになったと言う。天職というかとにかく明るくてきぱきとナヌムの家の仕事をこなしていた。

広場に行くと私のほかに日本からの訪問者が４，５人いた。創価大学生と卒業生が、民俗学の勉強のために訪れていたのだ。年間約１５００人くらいの日本人がここを訪れていると言う。広場の隅に日陰のあるテーブルがあり、裴春姫ハルモニが学生達に囲まれて談笑中だった。中国で慰安婦生活をし、終戦後すぐには帰国できず中国でつらい生活を強いられた。その後 1951 年日本へ渡ったということだ。とても陽気なハルモニで元日本軍従軍慰安婦という精神的な苦しみを身に受けた方には見えなかった。絵画を見ることのみを目的に伺ったナヌムの家ではあったが、目の前に流暢な日本語を話すハルモニが居られるので、恐る恐る感動した絵画の内容について質問してみた。ベー　ハルモニは「うちゃーそんなんすかん。思い出すだけで悲しくなる。花とか鳥とかそういったものばかり描いている。そんなのが好きな人もいるけど・・・」とおっしゃり、その後、身の上話をしてくださった。とても気さくな方で歌やチャンゴを叩くのがとても上手らしく米倉さんに言わせると娯楽部長だということだった。チュンヒというのは春姫と書き性格はまさに名前のとおりだと思ったが、ご本人は名前が悪いからこんな人生になったと悔やまれていた。芸能人気質で身なりもキチンとされ、私が伺っていた間に３回も衣装を変えてこられた。ちょうど昼食時だったのでハルモニ達とナヌムの家で一緒に食事をいただくことになった。粗食ではあったが、野菜、魚そしてお汁、それぞれ美味しくいただいた。おみそ汁の味が今までの韓国旅行では味わったことのない味だったので聞いてみると広州独特のおみそでこれが一番美味しいとのこと。臭みはあるが妙に納得した。ナヌムの家にはよく韓国人も訪れ、お菓子やラーメン、野菜、果物等たくさん寄付をする。それをボランティアの方がきちんと分配する。この日も兄妹だという中年の韓国人が軽トラックいっぱいの贈り物を持ってきた。

食事の後、米倉さんに案内され日本軍慰安婦歴史館へ向かった。側面の壁には林玉相の『誰がこの人たちに・・・』という銅板製モニュメントが設置され、戦争の愚かさと日本軍の暴挙、そして対面にはハルモニ達の昇華した精神性が表現されていた。表にも林玉相のブロンズ像『大地-ハルモニ』が設置してある。林玉相は光州ビエンナーレにも参加した、魂の叫びを土俗的なパワーで表現する作家で絵画も描いている。この場所でのモニュメント制作作家としては適任者だと思った。

2　日本軍慰安婦歴史館

歴史館入り口に大きなパネルがあり、白いチマチョゴリを着たハルモニの手が大写しになっていてその上に『私たちが強要に勝てずにしてしまったこのことを歴史に残しておかなければならない』と書かれている。最初からインパクトのある演出だ。最初の部屋には「証言の場」という設定で映像室、展示室があり映像資料とパネルで従軍慰安婦に関する基本的な知識が得られるようになっている。薄暗い地下に降りていくと「体験の場」ということで実際の慰安所と同じ設定で模型が作られ、中に入って不安な感覚を体験できるようにしてある。中国やフィリピンの慰安所の写真も展示してあり貴重な資料だ。３番目の展示室は「慰霊の場」とありユン・ソクナムの作品が展示され亡くなった方や帰って来れなかった方の慰霊の場所となっている。チョン・ウォンチョルの作品『証言』はハルモニ達の自画像を実物大に展示し、最初の証言者である金学順ハルモニから順々にライトアップされ肉声が出るように工夫さ

れている。階段を上がった4番目の展示室にはハルモニ達の作品が展示されていた。階段の壁にも所狭しと絵が掛けられていたが、第4展示室には天井から床までびっしりと絵画が展示されていた。やはり本物の迫力は本で見た比ではない。続々と寒気が起こった。

ハルモニ達は最初から絵画を描いていたわけではなく、共同生活を始めた当初はハングルさえも読み書きできない状態だった。新聞社にお願いしハングルを教えるボランティアを募ったところ、ハングル教育の先生数名と同時に弘益大学美術科を卒業した李京信先生から「美術の勉強を通してハルモニ達の精神治癒に役立てたい」との申し出があり、急遽絵画も勉強することになった。全てのハルモニが絵画を続けたわけではなく中でも金順徳ハルモニ、姜徳景ハルモニ、李容女ハルモニの3名が頭角を現し、熱心に描き続けた。

3 絵画に込められた思い

金順徳ハルモニの『手折られた花』fig.1 は拾ってきた刺繍の上に少女が描かれている。解説は慧眞院長著『ナヌムの家のハルモニ達』に詳しく出ているが、拾ってきた刺繍を洗って汚れを落とすと美しく、数日間使い方を考えたあげく絵の材料として使ったのだそうだ。つぼみの向こうに幼い朝鮮の生娘がたっている。「花がつぼみも開かないうちに凋んでしまったから・・・」この作品は純情な乙女が日本軍従軍慰安婦にされ、無惨にも手折られてしまった事を表現しているのだが、まさに金順徳ハルモニ自身でもあるのだ。絵の少女はナヌムの家の正面にある記念像のモデルとなっている。

姜徳景ハルモニの『奪われた純情』fig.2 は軍人と同化した桜の木の下に純情を奪われた乙女が裸で横たわり目を両手で覆っている。その根の下には多くの髑髏がある。「ある少女は、未だ生理もはじまらない幼い年に、純潔を端山のサクラの下で奪われた。その木は無数の朝鮮乙女の犠牲を肥やしに、血を吸って花開いた。」と解説にある。後に絵の指導をされた李京信先生にお話を伺うと「この絵が描かれた後、姜徳景ハルモニからこの説明を聞いて驚愕した。」と当時を振り返った。まさに解説そのままで少女の悲しみの上にサクラが爛々と花開き大きなサクランボまで付けている。言葉に出せない思いがこの絵からひしひしと伝わってくる。姜徳景ハルモニは15歳の高等科1年生の時、女子勤労挺身隊1期生として連れて行かれた。富山の不二越飛行機工場での過酷な労働と空腹に耐えられず逃げ出したところを憲兵に捕まり、強姦されて日本軍の慰安所に入れられた。当時、貧しかった人が多い中、彼女は女子高校に入学しており、裕福な家庭育ちでインテリだった。日本人の担任教師から女子勤労挺身隊に行くことを薦められそのあげく被害にあった。そのため日本政府に対して激しい怒りを持ち、ハルモニたちを毎週水曜日の抗議デモにかりだすなど指導的立場だった。1997 年 69 歳で永眠。人としての尊厳を踏みにじられたこの悔しさが、絵を描くことで日本軍の卑劣さを訴え、謝罪を促す毎週の水曜抗議デモの中心人物としてみんなを引っ張った原動力となったのだ。

李容女ハルモニの『連行される朝鮮少女』fig.3 は一見船旅で船首に乗って目的地を目指す3人の少女のように見えるが、内容は大変重いものが詰まっていた。構図の大半は海で目的地がどんなところか分からず小さく描いてある。船首だけが画面横からつきだし、未知の地への不安と期待が読みとれる。その先端に3人の朝鮮少女が乗っている。その1人が李容女ハルモニで他の2人は友人だ。看護婦として日本へ行けばお金も儲かるし良い暮らしができると聞かされ友人を誘って船に乗り込んだ。「あのとき誘わなければ」と、今、自分の誘いに胸が締め付けられる。そしてこの絵を描いた。

絵の解説はこのたび画集[1]が出版されたのでそちらをお読みいただきたい。

4 美術の力

ソウルに帰り李京信先生とお会いした。ちょうどソウルで『性展』という展覧会を始めるための準備の日だった。先生は先に記したようにハングル教育のボランティア募集の折、美術を通してトラウマの治癒ができないかと考え絵画教室のボランティアとして自ら連絡してきた女性である。当初、慧眞院長は「思いがけない申し出ではあったが、1人でも多く参加する方が良いという思いから、何の準備も

[1] 咲ききれなかった花（日本軍「慰安婦」ハルモニの絵画集：ナヌムの家

無しに、喜んで承諾してしまった。」と本の中で書かれているように絵画教室は予定していなかった。しかしこの予定外であった絵画教室がすばらしい結果を生むことになった。絵画の表現方法を知らなくても熱心に画用紙に打ち込み、辛いことを思い出し、怒り、涙しながらも描き出した絵画は、実は本当の心の叫びであり、自己表出の最良の方法だった。ハルモニ達は絵画に向かうとき無心になり、いやなことも全てを忘れて打ち込める。金順徳ハルモニが画集[2]の中で次のようにのべられている。「・・・また、絵も描いて昔のことが思い出されて辛くもあり、夜ごと頭に浮かんで気が狂いそうでした。・・・ですがその時の考えを一旦心の中に納めておいたことを絵で表現してみたら、いたたまれなかった気持ちが、しこりになっていた心の傷が取れたかのように、ただ心が安らいだんです。嬉しいとか悲しいとかいう感情をそのとおりに表現すれば、何も思い出さないように。そうして過去の記憶も忘れたんです。・・・」。

心の中の叫びを具現化する方法が絵を描くということで表出できた。それ故、見る人の心に深く感動を与え、謝罪を求め糾弾する強い力となった。そうして絵画に打ち込むうちに心の昇華が始まり、自分自身の怒りや自己否定を越えた悟りへと変容した。自らの人生に取り返しのできない傷を負わされながら、それを公表できなかった、現代の韓国社会。その中での葛藤は私には想像だにできない。ただただ言葉を失うばかりだ。多くの人がナヌムの家を訪れているが、訪れた韓国女子高生に「私たちはこんな目に会わされたけどあなた達は日本人を恨んではいけないよ」おっしゃるハルモニの心はどのように昇華されているのか、恨（ハン）と悲しみを自己の中に受け止め、純粋な子供たちの心を傷つけないように気を払うハルモニに、頭が下がらずにはいられない。

私が李京信先生とお別れするとき「先生の美術を通したトラウマ治癒の理論を実践し、このようなすばらしい結果を出されたことに感激した。」とお伝えした時「石川さんに会うまで私の行動に半信半疑だった。今の言葉を聞いて、やっと確信が持てた。」とおっしゃったことが耳に残っている。帰福する飛行機の中で「未だ美術は世界を救う力を持っている。まだまだ捨てたものじゃない」とつぶやいた。

5 二度目の訪問

最初の訪問では、歴史館に展示された完成され選ばれた絵画のみ見たので、どうしてもそのプロセスを見たく、再度ナヌムの家に向かったのだが、その前に絵を指導された李京信先生が近くにお住まいだったので、指導し始めのご苦労をお伺いしたく、強引に約束を取りお住まいまで出かけた。ご主人が某大学の教官なので官舎にお住まいだったが、部屋の中はやはり作家の部屋だった。居間の床一面に段ボールが引き詰められ、その上に幼児の自由奔放な絵が所狭しと描かれていた。美術教師としてはどうしてもそちらに関心が向いてしまうのだが、今回はハルモニの絵画教室開設当時の話を伺った。

どうもハルモニたちは開設当初、絵画教室が嫌だったようで、好感は持っていなかったようだが、ボランティアの若者が熱心に毎週２回やってくるので、「かわいそうだから参加してあげようか」程度の気持ちだったようだ。ハングルの勉強もある程度読めたり自分の名前が書けるようになるとやめてしまうハルモニもいたようだが、中国から帰ってきたハルモニは真剣に学んだようだ。李京信先生は「ハルモニたちには何の楽しみもなく、せめて絵でも描けるようになると心の楽しみになるだろう」とボランティアを始めては見たものの、最初の半年はどうなることか先も見えず、不安感が増していった。そんなある日事件が起きた。

6 絵を描くということ

絵画教室の準備をしていたある日、『日本政府は日本軍従軍慰安婦問題はなかったと発表した』というＴＢＳの放送がＴＶから流れたのを見た。その時、姜徳景ハルモニは怒りがこみ上げてどうしようもない気持ちになった事を李先生に告げた。絵画の意味や方法すら知らないハルモニたちに手を焼いていた李先生は、とっさに「その気持ちを色で言ったらどんな色？。その怒りを感じる色で塗ってみたら？」と姜ハルモニに告げた。その日から、ハルモニたちの絵に変化が表れた。

数日後、韓国のある画家たちが日本軍従軍慰安

[2]咲ききれなかった花（日本軍「慰安婦」ハルモニの絵画集：ナヌムの家

婦ハルモニをテーマに開いた展覧会をみんなで見に行った。その絵を鑑賞しながら、「上手に描いているね。」というハルモニに、「ハルモニたちがもっと上手に描けるよ。だってハルモニ自身のことだもの」と李先生はハルモニたちに言った。その日を境に、ハルモニたちは自分の感情をどうしたら絵に描けるか考えはじめ、執拗に李先生に聞き始めた。「こんなことを描きたい」とか、「この絵はこんな事を描いたのだ」等々いろいろお喋りしながら、絵画教室は進んでいった。最初は抽象的な線を引くとか色を塗ってみるとかしていたようだが、幼い頃の思い出を描くようになり、現在の身の回りや、木や花、鶏と言ったものを描いていた。しかし日本軍従軍慰安婦時代の絵は抜け落ちていた。あまりの悲しみで自身の記憶の中から当時を消し去らなければ、自己のアイデンティティーが成り立たず、精神異常を起こさなければならなかった。共同生活を始めた当初はメンタルケアーのためのカウンセリングが頻繁になされていたようだ。

そんなある日、姜徳景ハルモニが『奪われた純情』fig.2 を李先生に見せ、絵の説明を始めた。李先生は上記にも書いたが、その話を聞いて驚愕したという。「信じられない。こんな記憶がハルモニの心の中にあり、そのことをこんなにも雄弁に絵画は表現できるのか。」李先生はそれからはハルモニたちに心の思うままに描いてみるよう指導し始め、その結果が現在残されている絵となった。心象表現を繰り返し描き、やっと、失った、消さざるを得なかった当時の悲惨な自己がよみがえった。思い出し描くうちに感情は増長され、悲しみがこみ上げ気が狂いそうになった。夜中にうなされ飛び起き大声を出したこともあった。しかし絵を描くことで総てを忘れて集中できた。結果、絵画を通して悲惨な自己と向かい合うことができたために、そして心の叫びを表現できたためにハルモニの恨（ハン）は昇華し、聖女となった。以前は自身の不幸のみを口にしていたハルモニたちが、他の不幸な人に目を向け、いたわり、ベトナム民間人虐殺真実委員会や北の同胞の飢餓を知ると寄付金もし、自身が社会に還元できる心をもてるようになった。

7 当初の絵

終わりにあたり当初の絵を紹介したい（未発表）

fig.4（子犬）
姜徳景ハルモニの絵で表現力は幼いが動物への愛情が読みとれる。
fig.5（豚）
金徳順ハルモニの絵で愛嬌たっぷりな豚はハルモニの人柄を思わせる。
fig.6（にわとり）
金徳順ハルモニの絵で fig.5 同様ユーモアな表情が心和む。
fig.7, fig.8, fig.9
金福童ハルモニの絵で現在の幸せな日常と昔の幼い頃の楽しかった記憶を描いたものである。
fig.10, fig.11, fig.12, fig.13, fig.14
考えを具現化するために、指や花、鳥や犬といった身近なものを題材に絵の練習をしたもの。

ここに紹介したものは数多く描かれた絵画のほんの一部に過ぎない。今回あたふたと取材したため、絵の描き主が不明のものもあるがいずれ整理したいし、今後ナヌムの家から第２弾の絵画集が編集されることを期待する。

日本軍「慰安婦」問題関連　活動略年表

7.　1. 尹貞玉教授,ハンギョレ新聞に「挺身隊の足跡をたずねて」連載
　　7. 挺身隊研究会（現　韓国挺身隊研究所）結成
　　11. 37の女性団体と個人が集まり、韓国挺身隊問題対策協議(以下挺対協）結成
　　7.　8. 韓国内ではじめて軍「慰安婦」被害者、
　　金学順ハルモニ(当時67才が記者会見)
　　11. 被害者ら、日本政府を相手に戦争被害補償の訴訟を開始
1992. 1.8　駐韓日本大使館の前で水曜定期集会開始
　　.10 日本軍が慰安所に関与したことを証明する資料を発見（朝日新聞）
　　.13 日本政府、日本軍の関与事実を認める談話を発表
　　2.　韓国政府,被害者センターを設立して被害申告と証言の受付けを開始
　　国連女性地位委員会に公訴文を発送
　　8. 仏教人権委員会女性分科委員会、「ナヌムの家」設立推進委員会発足
1993.　3. 証言第1集『強制的に連行された朝鮮人日本軍「慰安婦」たち』
　　(挺対協,挺身隊研究会)刊行
　　7. 韓国政府「日帝下日本軍『慰安婦』に対する生活安定支援法」を制定
1994.　8. 日本政府,平和友好交流計画および民間慰労基金案に関する談話を発表
1995.　7. 日本政府,「女性のためのアジア平
1996.　　和国民基金」発足
　　12. ナヌムの家,現所在地に永久入居
1997.　4. 国連人権委員会,クマラスワミの「女性に対する暴力に関する報告書」発表および,日本政府の犯罪を公認する決議を採択
　　日本の民間基金案に対応するため,「強制連行された日本軍『慰安婦』問題解決のための市民連帯」発足
1997. 2.2. 姜徳景ハルモニ逝去
　　8.　金学順ハルモニ逝去(国内の総申告者192名中,1999年5月現在153名が生存)
1998.　8.14 日本軍「慰安婦」歴史館開館
2000.　1.16 金玉珠ハルモニ逝去
　　11.3 文明今ハルモニ逝去

参考文献

咲ききれなかった花
日本軍「慰安婦」ハルモニの絵画集：慧眞、姜済淑　著：　Deep Freedom 社
ナヌムの家のハルモニたち：慧眞　著：　人文書院
日本軍「慰安婦」歴史館資料：ナヌムの家
ナヌムの家歴史館後援会会報：ナヌムの家歴史館後援会
ハルモニの絵画展：日野詢城・都築　勤　著：梨の木舎

fig 1

fig 2

fig 3

◎感情表現を抽象的に表現したもの

その日の悪かったこと良かったことなどを思い出しながら、色や形にする

◎動物を描いたもの

fig 4　姜徳景（子犬）

fig 5　金徳順（豚）

fig 6　金徳順（にわとり）

◎日常生活を描いたもの

fig 7　金福童

fig 8　金福童（鶏小屋）

fig 9　金福童（昔）

◎観察スケッチ

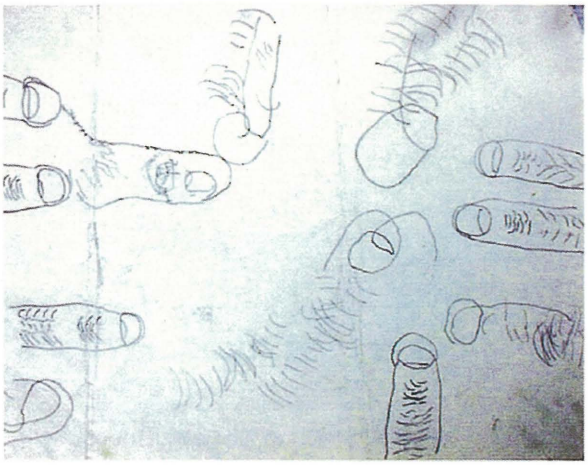

fig 10　指の練習

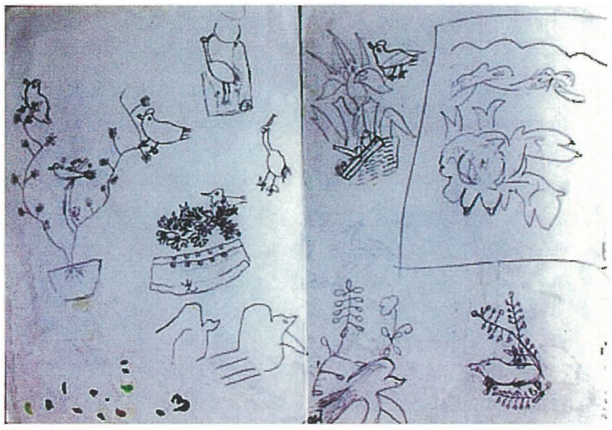

fig 11　鳥・花の練習

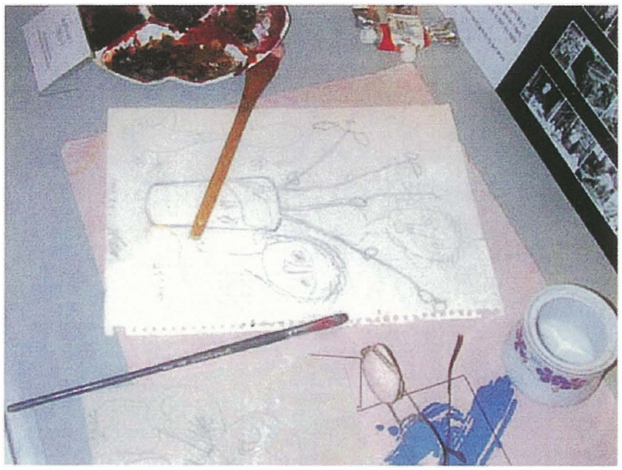

fig12　道具

fig 13　花瓶の練習

fig 14　木・子犬の練習